

海外の画家

最新情報

山田アキトシ 本誌パリ駐在員

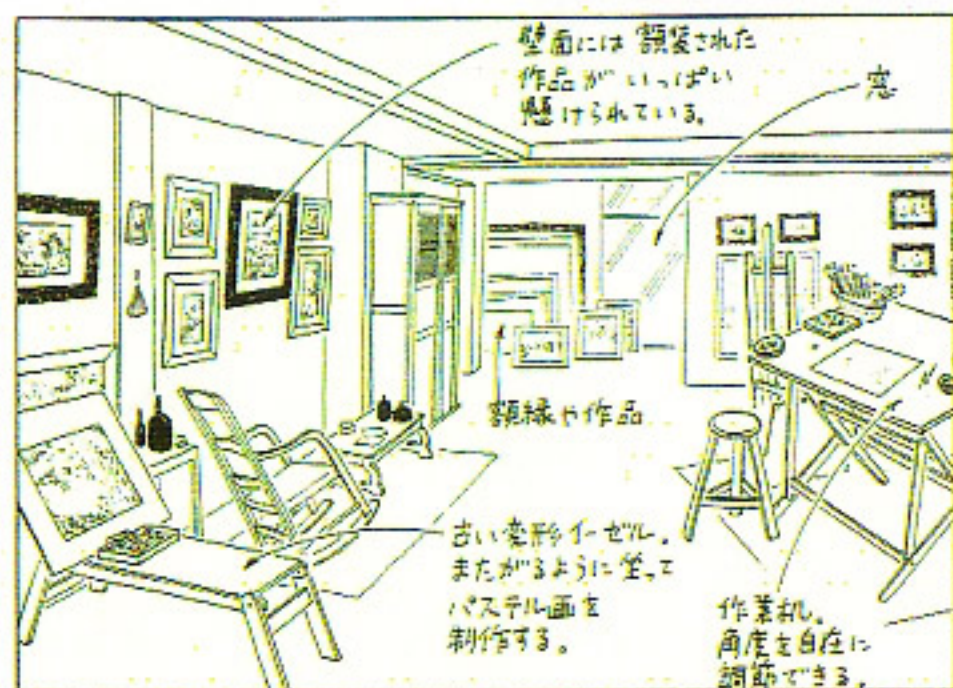
スペインの古典技法を学び、
溶き油も古い技法に基づいて、
自分で調合しています。

マリエタ・ケサダ
Marieta Quesada



Marieta Quesada

1962年ヴィゴ(スペイン)生まれ。
1988年サント・イザベル美術学校卒業。
以後、スペイン各地及びパリで多数の展覧会開催。
アーティスト・フランセ展グランプリほか受賞多数。



女性的な繊細さを見せる心地好いアトリエ。



幻想的な表現だが情熱的に見えるのは太陽に似た赤色のせい。

かけ、熟考しつつ仕上げていきます。
私にとっては、パステルは肉体的な画材で、油絵具は知性的な画材です」
街で目にするいろいろな物が、ある時、絵のイメージとなって湧き出て来る。それを鮮明に定着させるために、多くのデッサンを作り、イメージが十分に固まってから油絵の制作に着手するのだという。
「溶き油は、古い技法書の中に、記されている方法に基づいて調合しています。具体的には、テレピン、ベネチアン・テレピン、リンシードを一定の割合で混合し、グラスシ、厚塗り、ポカシなど、必要な効果によって使い分けられています。私の溶き油の使用法も、古典的な技法からきているわけです」
端正で理知的な容貌の彼女は、スペインの太陽に似た、温かい赤色が特に好きだという。

「油絵具の難点? 乾くの時間がかかる」というのは、確かに困りものですが、難点とは思いません。要は絵具の性質に適した方法で使用すればいいのですから、難点があるとすれば、正しく使っていない自分自身にあると云うべきでしょう」
あらゆる油彩技法に精通した人が持つ確信に満ちて、彼女は語る。
「フランドル絵画、象徴主義、表現主義などを自分の流儀で採り入れ、現在のスタイルを作ってきましたが、まだまだ自分の画風はできあがっていません。絵画というものは、果てしないものですから、これから長い時間をかけて探究していかねばなりません」
そう言って、彼女は黒い瞳を情熱的に輝かせた。マリエタ・ケサダは、パリの市井の依頼による大壁画の準備のかたわら、イタリア、イギリス、ニューヨークでの個展に向け、着実に制作を進めている。

父は有名な政治風刺画家、母も画家。音楽家の長兄を唯一の例外とし、兄弟姉妹、伯父など、周囲の親族総数11人は、すべて画家か彫刻家——典型的な美術家の家系に生まれ育ったスペインの若手女流画家、マリエタ・ケサダ。彼女は最近、パリで個展を開き、堅実な技法と豊かな感性に裏打ちされた完成度の高い油彩画で、美術界の注目を集めている。
「親族だけでなく、家に入りにする彼らの友人たちも、ほとんどが画家でしたので、子供の頃から、自分も大きくなったら絵描きになるのだ、と思っていました。母が絵の手ほどきをしてくれたり、父が画材をプレゼントしてくれたりして育ちました。それで絵を描くということは、私にとって、まったく自然なことでした」
緊密に塗り込まれた重厚なマチエールの作品が、個展会場の画廊の壁面で

鈍い光を放つ。
「自分自身の絵を見出すため、家族の元を離れ、スペイン南部のセビーヤにある美術学校で学びました。美術学校での5年間の教育は、伝統的なスペイン絵画の系譜を継承する、古典的で厳格なものでした。そこであらゆる古典技法を習得することができました。私の現在の技法は、すべてこの時学んだ古典技法の上に成り立っています」
彼女は、卒業時には、最優秀生に選ばれ、初めての個展を開催することになった。
「学校では勉強のため、あらゆる画材を使用しましたが、油絵具がもつとも自分の体質に合っていることが分かりました。それ以後は、もっぱら油絵具で制作しています。デッサンには、自分の手のように自在に扱えるパステルを使用し、素早く制作しています。これに対し、油絵は、ゆっくりと時間を